

詩編 30 : 2~4

ルカによる福音書 14 : 1~6

「引き上げてくださる方」

<安息日とファリサイ派>

今日から 14 章に入ります。13 章の終わりの方では、イエスさまが決意をもってエルサレムへと向かっておられること。エルサレムで苦難の死が待ち受けていることを知りながらも、救い主として、すべての人々の罪を贖うために、その道を進んで行かれることが語られていました。

そうやって、イエスさまがエルサレムへ進んでおられる途中の、ある安息日のことです。

1 節でイエスさまは、「食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになった」とあります。そしてその場で、水腫を患っている人をいやされたという出来事が語られていました。今日お読みしたのはそこまでですが、この場面は、実はここから 24 節まで続きます。そこまでが、この食事の席での一つの出来事なのです。

今回は 24 節までを、聖書の小見出しの通りに三回に分けますが、本当は、ここがひとまとまりになっていることを忘れないで、御言葉を聞いていきたいと思えます。

<安息日のいやし>

ところで、「安息日にイエスさまが人をいやされる」という出来事。実は、これはルカによる福音書では、今日を含めて三回も語られています。

安息日は仕事をしてはならない日、と律法に定められています。ユダヤ人、その中でも特にファリサイ派と呼ばれる人々は、この律法を厳しく守ってきました。神さまの律法を大切に思うからこそです。

しかし、熱心のあまり、いつしか戒めを守ることこそが一番大事なことになり、なぜ安息日の戒めを守らなければならないのか。そもそも、安息日は神さまがどのような思いで定めて下さったのか。そのことが忘れ去られるようになっていました。

安息日は、神さまがユダヤ人の祖先、イスラエルの民を、エジプトの奴隷の家から救い出して下さったことを感謝する日です。安息日は、その救いの恵みを思い起こして、神さまを礼拝し、賛美する日です。そうして、神さまとの親しい交わりに与って、民も、家族も、奴隷も、家畜も、寄留者も、みんなが神さまの安息に与る日。神さまによって力を与えられ、回復させられ、新しくされる日。それが、安息日なのです。

これまでイエスさまは、安息日には会堂に入って、神の国、つまり神さまの恵みのご支配、神さまの救いが、ご自分によって実現するということが、イエスさまこそが、すべての人を罪から解放して下さる救い主であるということ、人々に教えてこられました。そして、悔い改めて、神さまの許に立ち帰るようにと、救いへの招きを語ってこられたのです。

また、イエスさまは教えと共に、神さまのご支配が実現する「しるし」として、病や、罪の苦しみや、孤独の中にいた人を招いて、御前に立たせ、悪霊を追い出し、病気をいやし、それらの人々を苦しみから解放し、神さまの恵みに生きる者として下さいました。

それは、たとえ安息日であってもです。安息日にいやしの業を行なうことは、律法を字面通りに読むならば、仕事をしたことになり、石打ちの刑になるようなことです。

しかしイエスさまは、律法を形式的に守ることよりも、罪と苦しみに捕らわれている人が解放され、いやされ、神さまを礼拝する者になること。この、神さまの本来の御心を実現するために、御業を行なわれたのです。

しかし、律法を厳格に守ってきたファリサイ派の人々は、イエスさまが安息日にいやしの御業をなさることを受け入れられません。自分たちが守ってきたことに固執して、神さまの本当の御心を見つめることが出来ません。それで彼らは、神の御子であるイエスさまに対して、反発と、敵意と、やがては殺意を抱くようになるのです。

このような安息日のいやしの出来事が、ルカによる福音書では三回も語られています。それを順番に見て行くと、事態がどんどん進んでいくのが分かります。

#### [一回目]

まず、一回目の安息日のいやしは、6章6～11節です。イエスさまが安息日に会堂に入って教えておられたとき、そこに右手が萎えた人がいました。律法学者たちやファリサイ派の人々は、イエスさまを訴える口実を見つけようとして、イエスさまがいやしの御業をなさるかどうかが注目していた、とあります。イエスさまはそれをご存知で、手の萎えた人を真ん中に立たせ、いやされたのです。

イエスさまは、「安息日に律法で許されているのは、善を行なうことか、悪を行なうことか。命を救うことか、滅ぼすことか」と問われました。神さまの御心は、人々が救われ、恵みに生き、安息に与ることなのです。

これに対して、律法学者たちやファリサイ派の人々は、「怒り狂って、イエスを何とかしようと話し合った」とありました。これが、安息日のいやしの一回目です。

#### [二回目]

二回目は、13章10～17節です。この安息日も、イエスさまは会堂で教えておられました。そこに、十八年間も病にあって、腰が曲がったままの女性がいました。イエスさまはこの女性を呼び寄せて、「婦人よ、病気は治った」と宣言し、その病をいやされたのです。

しかし、そこに会堂長がいて、腹を立てた、とありました。彼は自分が責任を持つ会堂で

律法違反が行われたことが許せなかったのです。

これに対してイエスさまは、「偽善者たちよ、あなたたちはだれでも、安息日にも牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか。この女はアブラハムの娘なのに、十八年もの間サタンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか。」と言われました。

安息日は、牛も、ろばさえも、神さま恵みに与り、縄から解かれる日なのです。ましてや彼女は、会堂長たちと同じイスラエルの民であり、彼らの同胞であり、同じアブラハムの子孫、アブラハムの娘なのです。それなのに、ずっと苦しみに、弱さに、捕らわれ続けてきた。だからこの安息日にこそ、病に捕らわれ、弱さに打ちひしがれ、苦しみの中にある女性を解いてやるのは、当然ではないのか。安息日に、神さまの恵みの内に回復させられるのは、むしろふさわしいことではないのか。イエスさまは、そう言われたのです。

ここで、イエスさまの反対者は、皆恥じ入った。群衆はこぞって、喜んだ、とありました。

イエスさまの教えと御業を受け入れられない者たちは、一回目は怒り狂った。二回目は恥じ入った。そして、三回目の今回はどうだったのでしょうか。

#### [沈黙の三回目]

三回目、ファリサイ派の議員や人々は、一言も発しませんでした。

安息日、ファリサイ派の議員が用意した食事の席に、水腫の人がいて、彼らはイエスさまがどうなさるか、様子をうかがっていました。その視線が集まる中で、今回はイエスさまから問われたのです。「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか。」

彼らの答えは、もちろん「許されていない」となるでしょう。しかし、これまでのイエスさまの主張を聞いてきた彼らは、変に答えると言いくるめられてしまう、と思ったのではないのでしょうか。それに、きっと今日も律法違反をやるに違いない。そう思って、黙って見ていたのです。

やはりイエスさまは、病人の手を取り、病気をいやしてお帰しになりました。そして、言われたのです。「あなたたちの中に、自分の息子か牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか。」

安息日の律法の解釈の中では、仕事をしてはならないが、もし命に関わるような事態であれば、その人や家畜を助けても良い、ということになっています。

イエスさまにとっては、一人の人が、罪に捕らわれていること。神さまから離れていること。苦しみや悩みの中にあること。これは、その人の命に関わる事態として扱われることなのです。引き上げて当然のこと。しかも神さまの恵みを覚える安息日に、一人の人がいやされ、解放され、救われることは、神さまの御心に適ったことです。

これに対して彼らは、ファリサイ派の人々は、答えることができなかった、とあります。イエスさまが示される神さまの御心は、もはや明確です。

しかし、彼らはこれまで自分が守り続けてきたことを、変えることが出来ないのです。自分が信じ、正しいと思ってやってきたことを、捨てることが出来ないのです。神さまの御言葉を、素直に聞いて受け入れることができないのです。それで彼らは、沈黙するしかなかったのです。

このように、三回の安息日のいやしを通して、イエスさまは父なる神さまの御心を、最後には人々を沈黙させる程に、はっきりと、明確に示していかれたのです。

#### <ファリサイ派との食事>

さて、もう一つ。安息日のいやしが三回語られてきたことを見てきましたが、実は、イエスさまがファリサイ派の人に食事に招かれた、という場面も、今日のところを含めて、ルカによる福音書では三回、語られていました。

##### [一回目]

一回目は、7章36～50節のところですか。一緒に食事をするを願われて、イエスさまはファリサイ派の人の家で食事の席についておられました。そこに、町の一人の罪深い女が入ってきて、香油をイエスさまの足に塗ったのです。

イエスさまは、この女性に「あなたの罪は赦された」と宣言なさいました。その席の人々は、「罪まで赦すこの人は、いったい何者だろう」と考えました。

「いったい、何者だろう」。人々のこのような問いを引き起こしたのが、一回目のファリサイ派との食事の席でのことでした。

##### [二回目]

二回目は、11章37～54節です。イエスさまはファリサイ派の人から食事の招待を受けて、食事の席に着かれました。

ところがイエスさまは、その食事の前に、身を清めることをなさいませんでした。ファリサイ派の人々は、これを不審に思った、とあります。律法では、外で罪人に触れたり、汚れた者に触れたりしているかも知れないので、自分を清く保つために、必ず身を清めなければならないと定められていたからです。

これに対してイエスさまは、彼らが表面ばかりを取り繕い、外側だけを良く見せようとしているということ。一方でその内側、心の中は、強欲や悪意に満ち、本当に神さまを愛してはいない、ということ、を、厳しい言葉で非難されました。

これを聞いて、律法学者やファリサイ派の人々は、激しい敵意を抱き、イエスさまに質問を浴びせて、言葉じりをとらえようとねらっていた、とあります。激しい敵意。これが二回目の食事の席でのことです。

##### [三回目]

そして、今日の三回目です。先ほどの繰り返しになりますが、安息日に食事に招かれて、ファリサイ派のある議員の家にお入りになったイエスさま。多くの人々がイエスさまの様子

をうかがっています。そして、イエスさまの前に、水腫を患っている人がいた。この家の中に、水腫を患った人がいたのは、少し不思議なことかも知れません。

ある人は、イエスさまが安息日に再び掟を破って病をいやすかどうか試すために、ファリサイ派の人々が病の人を連れてきたのではないかと考えます。

またある人は、イエスさまがこの人を連れて来られたのではないかと、言います。水腫というのは、体が浮腫むことですが、当時は不道德な生活をした報い、罰としての病だと考えられていたようです。安息日の礼拝が終わって移動する時に、人々が避け、関わらないようにしていたであろうこの人に、わたしと一緒に来なさい、と声をかけられたのではないかと。

真相は分かりませんが、とにかく2節にあるように「そのとき、イエスの前に水腫を患っている人がいた」のです。

イエスさまの前に。もとのギリシア語では、「そして、見よ、彼の前に一人の水腫の人がいた」となっています。見よ。その人は、イエスさまの御前に。救い主の正面にいた。水腫を患っている人は、実はその家の中で、最も特別な場所にいたのです。

そしてイエスさまは、人々に安息日の問いかけをされ、それから彼の手を取り、病気をいやしてお帰しになりました。安息日であっても、井戸に落ちた者はすぐに引き上げてやるのだ、と言われたイエスさま。神さまの御心を行なわれたイエスさま。

ここで、ファリサイ派の議員や人々は、何も答えることができなかったのです。

一回目の食事の席では疑問、二回目は敵意、そして三回目はこの沈黙です。しかし沈黙の裏で、彼らの思いは殺意へと高まっていきます。やがてイエスさまがエルサレムに入られた時、律法学者や彼ら議員たちは、イエスさまを有罪と見做し、十字架につけると叫ぶのです。

#### <神さまの思いと人々の思い>

このようにして、三回の安息日のいやし、また三回のファリサイ派との食事の席で語られてきたのは、神さまの御心とそれに従うイエスさま。そして、御心に反発し受け入れない人々の姿です。イエスさまの救いの御業の前進と、人々の罪の深まりです。

神さまは、お造りになったすべての人が、罪から解放され、滅びから救われること。神さまの恵みのご支配の中で、いやされ、回復させられ、命を与えられて生きることを願っておられます。そして、その実現のためにこそ、神の御子イエスさまが遣わされたのです。

そしてイエスさまは、この父なる神さまの御心に従って、すべての人の罪を贖い、神さまの御許に立ち帰らせるために、エルサレムに向かっておられるのです。わたしたちの罪を背負うための十字架の死に向かって、前に進んでおられるのです。

神の御子イエスさまは、わたしたちを救うためなら、ご自分の命も差し出されます。このお方は、罪の中に捕らわれ、その深みにはまり、自分では抜け出せなくなっている者のために、その罪の底にまで、絶望の底にまで、降りてきて下さり、ご自分の命と引き換えに救い

出して下さるお方なのです。

イエスさまは今日のところで、「あなたたちの中に、自分の息子か牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか。」と言われました。

イエスさまは、井戸に落ちた者があったなら、それが安息日でも、何がなんでも、すぐに井戸の底にまでご自分が降って、落ちた者をすぐに引き上げてやらずにはおれないのだ。罪に苦しむ者があったなら、すぐにでもその者を救わずにはおれないのだ、と仰るのです。

井戸に落ちた者は、もう自分ではどうすることも出来ません。助けを待つしかない。誰かが手を伸ばしてくれるのを待つしかない。助けがなければ、死ぬばかりです。

罪に捕らわれているわたしたちも同じです。自分で罪を解決することが出来ない。滅びの中で、救いを待つしかない。自分でそこから這い出す力も、能力も、何もないのです。

しかしそこに、イエスさまが来て下さいます。天から降り、罪と悲惨の底にまで、滅びのどん底にまで来て下さり、わたしの前に立ち、手を取り、救い出して下さるのです。

わたしたちは、この手を握り返すことしか出来ないのです。この手を振り払ってはいけないのです。この手にしがみつくしかないのです。

しかし、ファリサイ派の人々は、あるいはわたしたちは、もしかしたら、自分は井戸を上から見下ろしている立場だと思っているかも知れません。

井戸に落ちた可哀想な人々。罪に捕らわれている悲惨な人々。でも、自分は井戸に落ちていない。自分はそれほど深刻な罪を犯していないし、滅びの中にいる訳ではない。…そう思っているから。自分は助けを必要としていないから。何がなんでもと、すぐに助け出そうとされるイエスさまを、批判したり、客観的に眺めていたり、あれこれ文句をつけようとしていたりしているのではないのでしょうか。

でも、本当はファリサイ派の人々も、そしてわたしたちも、井戸に落ちているのです。今すぐにイエスさまの救いが必要なのです。イエスさまの手を掴んで、罪の中から、滅びの中から、引き上げてもらわなければならないのです。

わたしたちはまず、自分がどのような状態にいる者なのか。自分には救いが必要で、自分ではどうすることも出来なくて、ただ神さまの恵みを待つしかない者であることを、知らなければならないのではないのでしょうか。

しかし、そのことを自覚したなら。そして、わたしたちが救いを神さまに求めるなら。

わたしたちは罪と滅びのどん底にあっても。病と苦しみと嘆きの只中にあっても。低くまで降ってきて、手を取って下さる救い主、イエスさまのお姿を、すぐ目の前に見出すことが出来るのです。

この方がわたしたちの前に立って下さっているならば。たとえ、そこが井戸の底でも、苦しみや困難の只中でも、病の中でも、死に取り囲まれていても、わたしたちは何も恐れるこ

とはありません。イエスさまのお側こそ、最も安全で、最も平安で、最も恵みに満ちた場所だからです。イエスさまは、救い主だからです。

イエスさまは、わたしたちの手を取り、いやし、そして引き上げて下さいます。罪の中から、父なる神さまの御許へ、帰らせて下さいます。

十字架に架かり、墓に葬られ、わたしたちの罪と、苦しみと、死の底にまで来て下さったこのお方は、死者の中から復活させられ、天に上げられました。

だからわたしたちも、イエスさまに手を取られたなら、天へと、神さまのご支配へと、まことの命へと、引き上げていただくことが出来るのです。

今日のこの安息日も、わたしたちはイエスさまの御前に立ち、手を取られ、引き上げられ、いやしと、平安と、命をいただきます。疲れを回復させられ、弱さを強められ、罪を赦され、新しくされるのです。神さまの御許で、まことの安息に、感謝してあずかりましょう。

### 【お祈り】

天の父なる神さま

今日もわたしたちに、あなたを礼拝する安息日。聖霊を注がれる安息日。イエスさまとの交わりに与る安息日を備えて下さり、ありがとうございます。

あなたの恵みこそ、わたしたちの命の源であり、平安であり、新しい力です。

わたしたちは日々の歩みの中で、自分が暗く澱んだ、絶望の井戸の底にいるように感じる場合があります。しかし、イエスさまが側に来て下さり、手を取り、わたしたちを引き上げて下さいます。どうかわたしたちが、イエスさまの救いを受け入れ、その御手にひたすら頼り、希望を失うことがないようにして下さい。

しかしある時には、わたしたちは、自分が井戸の外におり、罪とはまるで無関係かのように、救いが必要ない者であるかのように、高慢に振る舞うことがあります。その時には神さま、どうかわたしたちに悔い改めの心を与え、イエスさまの十字架と復活の恵みによって、生かされている者であることを思い起こさせて下さい。

今日からの日々、神さまの御心を思って、その愛に頼って、歩む日々でありますように。イエスさまの御名によって祈ります。アーメン